

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果(広報用)

プログラム名	マレーシア、サラワク州での農山村調査法実践演習プログラム	
学部・研究科名	全学教育機構	
プログラム実施期間	2019年3月4日～3月13日	
研修先(国・都市・施設名)	マレーシア・サラワク州、バラム河上流域農山村	
参加者数	10名	知の森からの支援者：10名
プログラム概要	本プログラムは、平成30年度後期の共通教育の教養ゼミ「環境マインドを現場で体験するゼミ(熱帯雨林)」において実施した。前期の講義科目、「熱帯雨林と社会」のアドバンス・プログラムとして企画した。海外活動先はマレーシア、サラワク州である。サラワクは、熱帯雨林の生物・文化の多様性の宝庫といわれ、かつ森林産物や一次産品を通じて日本と深いかかわりをもつ。演習を行ったのは、バラム河上流域のロング・バンガ村とバライ村である。現地では、国際協力の分野で活用されている参加型農山村調査法(Participatory Rural Appraisal; PRA)を演習した。PRAとは、外部者と地域住民が一緒になって、住民の生活や生計についての情報を集め、分析することによって、彼らのニーズや課題を探っていくアプローチ、手法のことである。現地では、サラワクの先住民であるサバン人とプナン人の方々に協力いただいた。	

実施状況・成果

具体的な活動と成果は次のとおりである。

1. 焼畑農耕を主な生業とするサバン人に対して、PRAを実施、グループ演習(聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーション)を行った。
2. 狩猟採集や焼畑農耕を主な生業とするプナン人に対して、PRAを実施、グループ演習(聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーション)を行った。村周辺の原生林地帯を歩き、そこでの資源利用について聞きとりを行った。
3. 移動には小型飛行機や4WD車両を利用したが、道中、木材伐採キャンプやアブラヤシ・プランテーション開発の様子を観察し、貿易を通じた自分たちの暮らしとのかかわりや課題について議論した。
4. マレーシア・ブトラ大学森林学部を訪問し、同大教員スタッフや学生らと意見交換や施設見学を行ったほか、昼食を囲んで和やかに交流した。
5. 旅行の事前教育として平成30年度後期の土日を中心に計5回集まって、PRAの訓練のほか、現地事情の学習などを行った。うち1回は本学全学教育機構の浅野郁助教から特別レクチャーをいただいた。
- 6 参加学生は現地ですべてまとめたプレゼンテーション資料に加え、帰国後に演習レポートを作成した。4月中に報告集(冊子)として発行する。

現地集落では、3つのグループに分かれて PRAの聞きとり、ディスカッション、プレゼンテーションを遂行した。学生たちは、当初は試行錯誤しつつも、次第に自分たちのもつ語学力で的確な質問をし、数値や図表を利活用し、丁寧に議論する方法を学んでいた。引率教員は全行程に帯同したが、学生たちは全員、村人と積極的にコミュニケーションをはかっていた。異文化コミュニケーション、社会人基礎力、環境マインドの醸成といった教育的な効果は顕著であると感じた。なお、成果の検証には、4月中に発行する演習レポート(報告集)も参考にす。また、平成31年度前期の教養科目「熱帯雨林と社会」において、主に本学1年生向けに報告会を予定している。

毎年数百名が受講する講義科目「熱帯雨林と社会」に比べれば、その人数はごくわずかにすぎないが、参加した学生も教員も講義では味わえない大きな達成感と手応えを感じた。今回、引率助手を依頼した農学部生の谷島亘君は今年より京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科へと進学する。彼は先輩に貴重な助言の数々をしてくれた。また、昨年度当ゼミに参加し、その後マラヤ大学に留学している経法学部の菅生陽南子さんとクアラルンプール滞時に面会した。彼女は、当ゼミに参加し、グローバルな課題への関心がさらに高まり、その解決に積極果敢に立ち向かいたいと語っていた。当プログラムに参加した学生にも自ら積極的に海外で出て行動してほしい。私自身、今後も本プログラムのバージョンアップに努めてまいりたい。

学生の声①-農学部 学生

めまぐるしく変化する日本で暮らす私にとって、村での暮らしはのどかで、十分満足できるものだった。日本に暮らしていると欲でいっぱいになる。ほしいものだって気軽に得られるから、次々に進化するものをとめてしまう。流行の最先端にいることは、一瞬かっこいいことのように感じられるが、よくよく考えてみると、形のないものに踊らされているような気持ちになる。ニワトリの声で目が覚めて、朝から畑に行ったり森に行ったりで食料を得る。屋は得たものでご飯を作り、その後は村人同士でゆっくりと時間を過ごす。子どもが帰ったら夕飯の時間。夜は家族でゆったり過ごし、早めに寝る。私は、こんな暮らしのなかで育ちたかった。

学生の声②-工学部 学生

マレーシアに行く前と、行った後で考え方が変わったことが一つある。それは森林破壊についてである。企業の森林伐採による自然環境の破壊が問題となり、現地の人々も反対しているものだと思っていた。実際企業伐採に反対する姿勢は見られたが、それは自然環境の破壊に対するものではないのではないかと感じた。なぜなら先住民も、家を建てるために木を切るし、食べるために野生の動物を狩るし、村の周りに平気でゴミを捨てていたからだ。特に村の周りに捨てられている包装プラスチックなどのゴミの山は衝撃的だった。これらから、私はマレーシア滞在中に、先住民は自然破壊に対して反対しているのではなく、自分たちが先祖代々暮らしてきた土地が、部外者によって勝手に侵略されていることに怒っているのではないかと考えた。

吹矢作りの工程を学ぶ(バライム村にて)



野生動物の生息状況を聞く(ロング・バンガ村にて)

